

第8代エルギン伯爵と大英帝国の世界

The Eighth Lord Elgin and Japan under the British Empire

北 政 巳

Masami KITA

1 はじめに

昨年、我が国では開港150周年記念行事が横浜、函館、長崎で行われた。徳川幕府が「鎖国」政策を破棄し、アメリカ人T・B・ハリスにより締結された1858（安政5）年6月19日の日米修好通商条約に続くオランダ、ロシア、英国、フランスとの神奈川5条約により、開港を決めた1859年7月1日に起因する。

最初に協定を結んだアメリカのハリス研究は数多くある。歴史家の多くが、その後の日英関係の重要性を認識しながらも、誰がどのようにして日英条約を結んだかについて十分な関心が払われてきたとは言えない。そこで本稿は日英通商修好条約を結んだ第8代エルギン伯爵に関心を向けたい^①。

2 エルギン卿の出自

エルギン伯爵家の起源をたどると、トーマス・ブルース（Thomas Bruce）が1633年6月にスコットランド国王から第3代キンロス（Kinloss）伯爵に任命された。なおキンロス卿は1608年に創設されていた。またブルース一族はファイフ（Fife）のキンカーディン（Kincardine）の地に起源をもつスコットランドの名門である^②。

著名なロバート・ブルースは1306年から1329年までスコットランド王として尊敬され、特に1314年のバノックバーン（Bannockburn）戦争でイングランド王エドワード（Edward）2世を撃破した英雄であり、スコットランドではウォレス（Wallace）家に並ぶ名門とされる。

トーマス・ブルースは同家系の支流にあり、ファイフ（Fife）州のブルームホール（Broomhall）に一族の居城がある。中世にはロバート1世、デイヴィッド2世の2人のスコットランド国王を輩出した^③。

エリザベス1世が後嗣を持たずに亡くなり、スコットランドジェームズ6世が招かれ、イングランド王ジェームズ1世となった。1603年の「王冠の結合」と呼ばれる。ブルース一族も彼に随行した。スコットランドの判事エドワード・ブルース（Edward Bruce）が、1608年にキンロスのブルース伯爵にも任命された。彼の死後に長男が、続いて弟のトーマスが継承し先述の伯爵家を興した。また彼は1641年にはウォートンのブルース男爵（Baron Bruce of Whorlton）に叙された。さらに彼の息子のロバートは1662年にアイレスバリー伯爵（Earl of Ailsbury）、ベットフォー

ドのアンプトヒルのブルース子爵 (Viscount Bruce of Amptill in Bedford), ヨークのスケルトンのブルース男爵 (Baron Bruce of Skelton in York) にも叙された。スコットランド貴族でイングランド貴族への最初の任命であった⁽¹⁾。

第3代目エルギン伯爵のトーマス・ブルースは1685年に爵位を継承したが、名誉革命に際してイングランド大衆が清教徒オレンジ公ウィリアムを歓迎したのに対し、カトリックのスコットランド出身のジェームズ2世を支持した。ジェームズ2世のロンドン脱出にも同行、さらに彼の奪回を計画し捕縛されロンドン塔に幽閉された。彼の死後、息子のチャールズが後継して第4代エルギン伯爵となり、さらに第2次ジャコバイト反乱後の1746年4月にウィルトのトッテナムのブルース男爵 (Baron Tottenham in Willts) に任命され、1707年のイングランドとスコットランド合併後の英国 (連合王国 United Kingdom) 貴族に叙せられた。彼に後継者なくウォールトン男爵は断絶、キンロス嬢は保持不詳扱いとなるが、遠戚のブルース家から第9代のキンカーディン伯チャールズ・ブルースがエルギン伯爵を引き継ぎ、トッテナムは第4代エルギン伯の孫のジェームズ・ブリッジスが後継した⁽²⁾。

第5代エルギン伯爵は1771年に死去し、息子ウィリアムが僅か7歳で後継したが数ヶ月後に亡くなり、その弟トーマスが5歳で第7代エルギン・11代キンカーディン合同伯爵となった⁽³⁾。

3 第7代エルギン伯爵

母親マーサ (Matha) の方針で、また一族がスコットランド・イングランド両国に広がっていることもあり、トーマスは親イングランドの教育を受けた。8歳から12歳までロンドンのウェストミンスター (Westminster) 学校に学び、16歳でスコットランドに戻りセント・アンドリュース (St. Andrews) 大学でギリシア・ラテン語を学び、古典時代作家知識に秀で、文才を発揮して「ギリシア悲劇」の論評で大学賞を獲得する程だった⁽⁴⁾。

ちょうど18世紀の後半は、スコットランドは啓蒙主義 (Enlightenment) 全盛時代でスコットランド文芸復興 (Renaissance) の時代であった。セント・アンドリュース大学の学長のウィリアム・ロバートソン (W. Robertson) からの刺激を受け、トーマスは市民法 (civil law) に関心を深め、外交分野に進むことを決意する。1785年、18歳の時に母親の薦めるドイツ留学を嫌いフランス・パリのパリ高等法学院で学ぶ。その後、陸軍に従軍しスイス、フランス、ドイツを回り経験を積み陸軍大将の資格を得た⁽⁵⁾。

そして24歳の時にスコットランド近代化の指導者ヘンリー・ダンダス公 (Lord Henry Dandass) の目にとまり外交分野への道が開ける。1790年にハーグ (Haig) に派遣されオランダ、オーストリアでの情報収集に力を発揮し、翌年にはブリュッセル、さらにベネチア、ベルリンで活躍した。1790年-1840年の間、英国貴族院の議員をつとめた⁽⁶⁾。

1798年頃からフランスにナポレオンが登場して勢力を増しエジプトを侵略、さらにトルコへの進撃を試みた。エルギン伯爵は同年11月に国王ジョージ (George) 3世からトルコのオスマン帝国への英国特命全権大使に任命された。翌年早々にスコットランド地主のメアリー・ニスベット

(Mary H. Nisbet) と結婚して1801年にイスタンブールに赴任した。そして当時オスマン帝国領であったギリシアを訪問、パルテノン神殿建築や彫刻を調査した。エルギン伯爵は特に神殿彫刻に関心を持ち、当時ギリシアを占領統治していたスルタン・セリム3世の許可を得て、一部を剥ぎ取って英国に持ち帰った。その背景には、当時のオスマン帝国はナポレオン率いるフランス軍のエジプト遠征直後にあり、1801年秋にフランス軍を撃退した英国とは良好な関係にあったことが挙げられる。大理石は1802年から3度にわけて運ばれ英国へ届いた。

トーマスが離婚した2年後の1810年に母親が亡くなると、トーマスがアテナイ大理石の入手・輸送・保管に費やした巨額の借財問題が深刻化した。大英博物館へ買い取り交渉を試みるが成功せず、一層の苦境に陥ることになる⁽¹⁾。

1807年2月にロシアがトルコに戦争を仕掛け露土戦争が生じた。英国はトルコ同盟国としての対応を迫られた。ハミルトン公爵の薦めでトルコ・ギリシャ事情に精通したレバント (Levant) 会社のマルタス (S. Maltas) を雇いし情報収集につとめ、交渉を優位に進めて1812年1月のダンタネルズ (Dardanelles) の和平条約を結ぶ。トーマスはエリザベス・オズワルド (Elizabeth Oswald) と再婚し1811年3月にロンドンでの生活を始めた。同年11月ジェームズ (後年の第8代エルギン卿) が生まれた⁽²⁾。

当初は持ち帰った大理石はエルギンのファイフの居城やロンドン地所に保管され、売却も考えたが成功せず、悪戦苦闘の日が続いた。1808年に大英博物館の主任ライブラリアンのプランタ (J. Planta) からアプローチがあり、数年の交渉を経て1811年に売却が決まり、最終的には1816年に大英博物館へ収蔵された。貴重な美術品が散逸せず大英博物館に収蔵されることになりエルギン伯爵も安堵するが、その金額は実際に彼が支払った額の半分にも満たなかった。

他方1810年に聖地を訪問し「芸術品剥ぎ取り」を見たギリシア古典芸術愛好の英国人詩人バイロン (Byron) は激怒し、エルギン伯爵は「古典芸術破壊者」として攻撃を受ける。「エルギンの生贖」と呼ばれ「ギリシア女神のミネルバ (知恵・芸術) の呪い」と題する詩の献呈を受け、第7代エルギン卿は「エルギン・マーブル」の名前で世界的に有名となった。この大理石をめぐる、現在まで返還を求めるギリシア政府と拒否する英政府間の火種となった⁽³⁾。

4 第8代エルギン伯爵の背景と経歴

第8代エルギン伯爵となるジェームズは1811年7月に第7代エルギン伯爵の再婚したエリザベスの長男に生まれた。1825年14歳でイートン校に入学し、特にギリシア古典に優れた才能を発揮した。さらに実弟のフレデリック (Frederic) も同校に入学し、さらに兄弟ともオクスフォード大学に進んだ。

イートン校でジェームズはエディンバラ出身のグラッドストーン (W.E. Gladstone) と出会う。2人は生涯の友人となり共にオクスフォード大学に学ぶが、グラッドストーンがジェームズの雄弁に讃嘆したことは有名である⁽⁴⁾。

グラッドストーンは英国首相を4期つとめ大英帝国の繁栄を象徴する指導者となるが、彼自身

が作ったイートン校エッセイ・クラブのメンバーには当時の首相ジョージ・カニングの息子で後年インド初代副王となるチャールズ・カニング (Charles Canning) 伯爵、ダルハウジー (Dalhousie) 伯爵となるジェームズ・ラムジー (James Ramsay)、クリミア戦争初代陸軍大臣で英国植民地大臣、ニューカッスル公 (Duke of Newcastle) となるリンカーン伯爵 (Lord Lincoln)、クリミア戦争の時にナイチンゲールを呼んだことで有名になるシドニー・ハーバート (Sydney Herbert) 男爵、また初代英国中国公使となるジェームズの弟がいた⁽¹⁴⁾。

1830年代の英国社会は内外に大きな問題をかかえていた。国内では産業革命の進展による貧富の拡大の社会問題が深刻化し、労働者プロレタリアートの権利を主張する民主主義が高揚し工場法や普通選挙法が制定された。また国外では、英国自由資本主義が自由貿易を掲げて発展し大西洋時代からインドから中国、太平洋地域へ進出し、同時に紛争や衝突を引き起こした時代であった。

英国自由貿易主義の旗のもと、東インド会社が1813年の対インド貿易の独占権撤廃に続き、1833年の対中国貿易撤廃を実施した。その背景には、長年イングランドの属領的地位にあったスコットランドが産業革命を通じて特にグラスゴウとクライド河流域が英国随一の重工業 (鉄工・機械・鉄道) となる時代を迎え、グラスゴウ出身の商人・技師が海外、特にインドから東南アジア・中国へ向けての活躍が展開された⁽¹⁵⁾。

1707年の合併後、スコットランド伝統の実務教育を体得したスコットランド人は技師・宣教師・教師・商人として海外に渡ったが、そこには外交官に転身したスコットランド貴族が、多くの同胞人を誘引・紹介したことが注目される。事実、1852年にアバディーン公爵のゴードン (G.H. Gordon) が首相となるが、彼は1828-30年、1841-46年の2度外務大臣をつとめ、スコットランドの多くの友人・知人をビクトリア期の拡大する英帝国の外交・渉外役に任命し、アフリカ、インド以東のアジア、極東地方に多かった⁽¹⁶⁾。

ジェームズ・ブルースはオクスフォード大学を優秀な成績で卒業後、故郷に戻り父の第7代エルギン伯爵の残した莫大な借財処理に当たった。政治家を志し、1834年には「英国選挙民への誓簡」を公表、ナポレオン戦争の英雄で1828-30年首相を務めたが人気下降気味のウェリントン (Wellington) 公爵擁護を展開した。1839年には故郷ファイフから立候補したが落選、1841年にサザンプトンから立候補し国会議員となった。前年1840年に嫡男の兄ジョージが死去し、彼がエルギン家後継者となった⁽¹⁷⁾。

しかし1842年に、英国植民地相のスタンレー (Lord Stanley) 伯爵から下院議員を辞してジャマイカ総督 (Governor of Jamaica) を受け入れるように要請され受諾、出発に際しスターリング選出の下院議員ブルース (C. Cunning Bruce) の娘と結婚する。だが夫人はジャマイカ到着直後に娘を出産後、急逝する⁽¹⁸⁾。

ジャマイカ総督としてのジェームズ・ブルースは、黒人解放後の社会経済の混乱する環境の中で慎重に公正に振舞い、植民した人々また黒人双方から信頼され、彼自身の信条であるスコットランドの啓蒙主義を掲げた。ジャマイカの近代化・市民社会化を目指し、スコットランドから導

入した構想、つまり農業促進協会を設立して新農業の普及、聖書や訓育書学習を通じての学識の向上、また職業技術向上への教練校設置等の尽力を行い、西インド諸島全域の行政機構の効率的ネットワークの確立を目指した。エルギン伯爵のジャマイカ統治は英政府また植民地民からも最大の評価を与えられたが、妻を亡くした悲哀と苦悩また故郷での活躍に憧れ帰英を希望した。しかし実際の帰英1年後のグレイ伯爵 (Lord Grey) が植民地相になった1846年の自由主義 (Liberal) 政府のもとであった⁹⁰⁾。

エルギン伯爵はジャマイカでの総督再任を要請されたが断る。また当時の英政府は彼の主義信条とは異なる政府であったが、彼の有能さを評価してカナダ総督 (Governor of Canada) 職を提供される⁹¹⁾。

当時のカナダはカナダ土固有の諸産業は衰退して深刻な社会・経済事態にあった。ジェームズは北米での活動を考え、グラム伯爵 (Earl of Durham) の娘メアリー (Mary L Lambton) と結婚した。義父は1837年のカナダでの反乱に際して、短期間であったが総督であった人物で、娘はカナダ生ちでエルギン伯爵は現地の政治状況を極めて正確に把握し、また迅速に対応できた。

エルギン伯爵の思想・哲学背景には、スコットランドの啓蒙主義があり、ジャマイカ同様に宗主国の英国と現地の植民者・現地人の間において、信念をもって行動した⁹²⁾。

カナダでは1791年の法律で上部カナダ (Upper Canada) と下部カナダ (Lower Canada) に区分されたが、双方がイギリス人居住区とフランス人居住区に分かれ、後者地域に住む英国人は少数だった。翌1792年に副総督シムコー (Simcoe) が上部カナダも英国式の政治形態に適應させると公表した結果、両地域とも、特に中央政府行政と下部カナダ在住者との摩擦が深刻化した。英国政府は事態収拾に勧め1840年には英帝国議会で「合併法」 (Union Act) を決めた。エルギン伯爵前任のラッセル伯爵 (Lord John Russell) やシディナム伯爵 (Lord Sydenham) は尽力したが、問題解決に成功しなかった。

難しい状況下の1847年1月にエルギン伯爵がカナダ総督任命を受けて着任した。彼の英仏言語能力と内外の知識、さらに義父から受け継いだカナダ政情と文化についての理解が役立ち、英政府の意向を受けながらカナダ各地の利害衝突を認識し、さらに民族・階級の差を越えて信頼を集めた⁹³⁾。

カナダは上部カナダの司法長官 [attorney-general] ラフォンテーヌ (L.H. LaFontaine)、と下部カナダの司法長官ボールドウィン (R. Baldwin) の合同内閣が1851年10月までカナダ統治をおこなった。エルギン伯爵は自由主義貿易の信奉者としてカナダでも広大な国土に多くの産業と通商を育成し、母国の経済力と競合する方向性を打ち出した⁹⁴⁾。

1849年1月にエルギン伯爵はモントリオールに着任、フランス人居住者のためにカナダ公文書には英仏双方を認め、カナダ帝国議会で自ら双方の言葉で演説した。その後も過去の反乱余波は続いたが、次第にフランス語居住者が政府を信用し「民族と文化の混合したカナダ」を母国とするカナダ人意識が醸成された。1853年に一時帰国した時、エルギン伯爵は「きわめて有能でカナダ統治に貢献した」と賞讃を受けた。

カナダ社会では、上部カナダの改革運動に直面しラフォンテーヌが辞任、次いでポールドウィンも辞め、続いてヒンクス (J. Hincks) = モリン (A. N. Morin) 内閣、さらにマクナブ (A. Mac-Nab) = モリン内閣となった。宗教・文化的には特に上部 [北部] 地方では、スコットランド高地移民が持ち込んだ影響が強かった⁽⁶⁴⁾。

エルギン伯爵の方針はカナダをアメリカとも相互互惠関係をもつ北アメリカ (North America) として把握し、全域の各州間でも互惠関係の通商を活発化することであった。この時代の最大の論議は鉄道開通資金調達方法、技術導入様式、工事方法さらに鉄道敷設路線をめぐる利害が対立したが、エルギン伯爵は視野を広げてアメリカを訪問し、北アメリカとしての相互互惠を主張して交渉した。

彼は宗主国、またカナダ植民地を代弁して、1854年6月5日、アメリカの国務長官マーシー (W. L. Marcy) との間で、小麦、穀物、家禽類、塩蛙を含む魚類から羊毛・木綿、さらに鉱石・貴金属全般商品取引や、セント・ローレンス (St. Lawrence) 河やミシガン湖の航行権までを取り決めた。エルギン伯爵の卓越した外交力の背景には、同郷で同窓のグラッドストーンの政治手法影響があった⁽⁶⁵⁾。

エルギン伯爵は1854年12月にカナダ総督職をヘッド (E. Head) 伯爵と交代し帰英するが、カナダ大衆からも、彼の統治下8年間について「最大の賛辞」を与えられた⁽⁶⁶⁾。

イギリスは1855年には機械輸出禁令を撤廃して、完全な自由貿易主義の旗を掲げた。植民地から原材料を輸入、英国で製造・加工して、さらに世界市場へ輸出・販売する時代を迎えた。スコットランド起源の鉄道、海運、電信ネットワークが大西洋、太平洋をつなぎアジア、オセアニア、アフリカを結び、世界市場を拡大・確立した⁽⁶⁶⁾。

1856年10月に中国で「第二次アヘン戦争」と呼ばれる「アロー (Arrow) 号」事件が勃発した。翌年の春に深刻な事態回避のため、エルギン伯爵はパーマストン伯爵 (Lord Palmerston) に呼ばれ特使として訪中する要請を受けた。このアロー号事件は、中国 (清) 官憲が英国籍を名乗る中国船アロー号を臨検し、清人船員12名拘束、3名を逮捕した事件で、広東領事パークス (H. Parks) が抗議したが交渉は決裂、さらに英国全権使節の香港領事ボウリング (J. Bowring) が海軍を指揮して広州付近の砲台を占拠した。それに反発した中国人が居留地を焼き払う事件が続き問題は深刻化した⁽⁶⁷⁾。

その背景には1830年代中葉以降に、イギリス資本主義がインドから中国へ本格的に進出し、しかも、インドからアヘンを中国へ持ちこみ、中国から貴金属を始め奢多品を持ちだす「三角貿易」を作り上げ、強引な富の搾取の展開と拡大を実行した。

パーマストン首相はエルギン伯爵と英本国軍隊の派遣を決めるが、議会の反対に遭遇した。そこで首相は議会を解散し、総選挙で勝利して国民の支持を得てエルギン伯爵と兵士5000名の派遣を実施した。派遣されることになったエルギン伯爵は、帝国主義的膨張と植民地争奪競争を展開し世界各地で衝突するライバル国フランスにも、フランス人宣教師が中国で殺された件を持ちだし、ナポレオン3世に要請し軍隊派遣協力を得た⁽⁶⁸⁾。

エルギン伯爵と英国軍隊は7月に香港に到着したが、インドではセポイの反乱が起り、鎮圧中であった。エルギン伯爵は自分の判断でインドに向い、セポイの乱を鎮圧した。すぐにシンガポールに反りエルギン伯爵を軸とした英仏連合軍が艦隊を率いて中国へ到着・交渉、中国の申し出により天津での条約批准に臨んだが、迎候もなく河には多くの障害物が置かれていた。撤去中に中国軍不意の攻撃を受け上海に撤退した。また反乱は再発し各地に波及した⁽⁹⁰⁾。

エルギン伯爵率いる17000人の英軍とジャン＝バプティスト・ルイ・グロの率いる仏連合軍が広州を攻撃し、12月には反乱首謀者をとらえ広東を奪還した。翌年1858年2月には英・仏・露・米で共同して北京政府に条約改正を求めたが決裂、英仏連合軍は再び北上して天津を鎮圧、天津条約を締結する話を進めた。内容は首都北京での外国人公使の駐在、キリスト教布教の公認、国内河川航行権の許可、英仏国への賠償金支払い、他方アヘン輸入の公認等を求めた。

清国側代表から条約批准までに2、3週間必要との返事があり、アメリカのハリスが日本と修好条約を結んだ報を聞いた本国外交部がエルギン伯爵に日本訪問と条約締結の特命を与える。1858年7月出帆して8月4日に長崎に入港する⁽⁹¹⁾。

5 エルギン伯爵の秘書オリファント

第8代エルギン伯爵を少なくとも日本で有名にしたのは、彼の秘書として随行し『エルギン卿遣中日使節録』を著述したオリファント (Laurence Oliphant) であろう。オリファントは、1829年に南アフリカのケープ植民地でスコットランド出身の弁護士で州法務長官を父に、第72ハイランド連隊長の娘を母に生まれた。父はセイロンの最高裁判所長官に移動。オリファントは17歳でケンブリッジ大学に入学、卒業後はジャーナリストとしてヨーロッパ各地を旅行した。彼はクリミア戦争の取材でトルコを訪問した時にエルギン伯爵と知り合った。彼が秘書としての誘いを受けた時、オリファントの能力の高さを評価した国務大臣のクラendon (Clarendon) から招請を受けた。しかし彼は母がエルギン伯爵家と懇意であったことからエルギン伯爵を選び、先ずカナダに随行する。エルギン伯爵の対アメリカとの交渉にも、多くの情報を仕入れて貢献した。当時のブキャナン (Buchanan) 大統領、また将来大統領になるリンカーン (Lincoln) にも会見した記録を残した⁽⁹²⁾。

オリファントは、1855年にエルギン伯爵の帰英と共に帰国し、再びジャーナリストとしてトルコ、中央アジアの取材で活躍した。エルギン伯爵が中国への特命全権大使として出発する際に、招請され再び秘書として「アロー号事件」交渉同行に同意した⁽⁹³⁾。

本国出発後にオリファントも期待していたがエルギン伯爵の訪日が決まり、同行記録の「戦乱の中国と平和の日本」を対比的に描いた報告書を残した。また退役軍人のベッドウェル (R.N. Bedwell) が描いた水彩画記録が挿入された。またエルギン伯爵には写真家ジョスリン (W. Jocelin) が同行し初期の湿版写真で撮影の写真があるが、あまり鮮明ではない。その他、エルギン伯爵に同行したフェリアス号船長のオズボーン (C.S. Osborn) が記録した『日本への航海』がある⁽⁹⁴⁾。

オリファントの人生も極めて興味深い。1859年の春に中国から英国に帰国、1860（万延元）年末に外務大臣ラッセル（John Russell）公の推薦により日本公使館の一等書記官の任命を受ける。翌1860（文久元）年6月末に日本へ到着したが、直後の7月5日に宿舎の東禅寺で乱入した水戸浪士の刀で負傷、帰国せざるを得なかった。帰国後は父の故郷のスコットランドのスターリング（Stirling）から選出され38歳で国会議員となり活躍する。帰国したオリファントは、負傷したにも関わらず、多くの人に極東の島国・日本を未来と希望と平和の国として講演旅行した他、新聞に論評を載せ多くの人の関心を集めた。

またローレンスは晩年、アメリカ人ハリス（Thomas Lake Harris）の神秘主義的なプロテスタンティズムに傾注し、1867年に突然に幕末に薩摩藩から密航した英国滞在の日本人青年数名を連れてアメリカに渡り「自然生活」に入った。さらに結婚して1881年頃にはイスラエルのパレスチナに住んだが、1886年頃に妻を亡くし2年後に再婚する。その相手がスコットランドの紡績業と近代協同組合方式で有名となったR. オーウェンの孫娘であった。その新婚旅行途中のロンドン訪問中に病没した⁶⁴⁾。

またエルギン伯爵が英政府の命を受けた1860年の再度の訪中には、ロッホ（H.B. Loch）の編集した記録「エルギン伯爵の1860年の2度目の中国訪問」がある⁶⁵⁾。

6 幕末の日本社会

エルギンが訪問した1858年の日本は、250年にわたる徳川幕府の所謂「鎖国」社会の根柢が動搖をきたしていた。

イギリス資本主義の自由貿易主義が世界市場を包摂し、陸上をつなぐ蒸気機関車、水上をつなぐ蒸気船、空間をつなぐ電信ネットワークにより「陽の沈まぬ大英帝国」を作りあげた。イギリスに続いて他の西欧諸列強も原材料と商品市場を求めてアジアに到来した。特に新興国アメリカは大西洋を横切ってアジア各地に渡航できる基地として日本へ、特に最短距離の地・函館に大きな関心を持ちアプローチした⁶⁶⁾。

圧倒的な武力で日本を威嚇してくる西欧諸国の圧力を前に、いかに対処するかが問われる時代であった。先ずアメリカが1854年3月に日米和親条約、同5月に追加条約を結ぶ。その噂を聞いた英国の東インド艦隊のスターリング（J. Stirling）が来日し8月に日英和親条約を結ぶ。さらに同年12月には日露和親条約、翌年1855年12月日蘭和親条約と続いた。また1857年5月に日米和親修正条約、同年6月に日蘭和親追加条約、9月に日露和親追加条約を結んだ。西欧諸列強の日本へのアプローチを前に、幕府は先ず旧来の窓口の長崎と江戸から離れた北海道の函館を対外通商の窓口で対応した。あくまでも外国船への食糧・燃料の供与が目的であり、日本からの輸出入は全く念頭になかった⁶⁷⁾。

しかしイギリスやフランスに比して、中国や東南アジア各地での通商ネットワークの構築に参加できなかった新興国アメリカは、日本に焦点を当て強引なアプローチを試みる。その結果、アメリカ東インド艦隊長のペリー（M. Perry）提督の訪問、ハリス（T.B. Harris）の開国要求に

より、西欧との最初の条約として、1958（安政）5年6月18日に日米修好通商条約が締結された⁽⁴⁰⁾。

この画期的な知らせが西欧諸国に伝わると、一斉に条約締結を求めて各国使節団が到来した。その結果、同種の協定を同年7月10日に日蘭間、翌11日に日露間、18日に日英間、9月3日に日仏間で結び、その他の国々も続いた。

その間、篤姫の夫である13代将軍の徳川家定は、アメリカのハリス総領事と会見直後の安政5年7月6日に病死した。幕府は内外の動揺に配慮し喪を隠して諸外国に対応した。さらに後継した14代の家重も、また短命に終わることになる。

一方、幕府への信頼を失くした諸藩にも動きが見られた。特に薩摩藩は1857年に薩摩安政改革を実行し、藩主島津斉彬が將軍継嗣問題に干渉し始めた。そして養女篤姫を將軍家に送り変革を画策するが、斉彬は故郷でコレラに罹り7月16日に死去した。斉彬は次の時代を見越して、若手藩主に偽名を与え英国へ密航させた。また既に長州藩士5名は脱藩して英国へ密航していた⁽⁴¹⁾。

しかし封建的反動から同年9月には所謂「安政の大獄」が起こり、革新的な開明・進歩派は断圧を受ける。諸外国との神奈川条約上での約束により1859年5月28日（西暦7月1日）に神奈川、函館、長崎が開港された。他方では10月に橋本左内や吉田松陰を刑死させた⁽⁴²⁾。

封建反動に反対する水戸藩浪士が1860年3月に「桜田門外の変」で井伊直弼大老を刺殺した。また諸外国への対応として海外渡航容認を主張し、長井雅学が航海遠略策を提言した⁽⁴³⁾。

さらに1862年1月に「坂下門外の変」が起こり、3月には父親の遺志を継いだ島津久光が公武合体運動を図り上京した。他方4月には京都で寺田屋事件が起こり、高杉晋作が刺殺された。6月には京都朝廷の大原特使が將軍家茂に勅命を伝達し、一橋慶喜を將軍後見職に推薦した。おそらく当時は未曾有の混乱の日々であったと推察される⁽⁴⁴⁾。

ハリスの主張によって、従来の一分銀4枚で金一面、また外国との取引では品質の高い一分銀1枚と交換するには西欧のメキシコ銀3枚の交換ルールから、重量によってメキシコ銀1枚で日本の一分銀1枚との兌換要求を受容させられ、大量の金銀が海外に流れた。幕府は改鑄しての対応を試みたが、諸外国の強硬な反対を受けて挫折した。それは国民経済の混乱を招き、インフレを招き人民の心から徳川幕府支持は消えていく⁽⁴⁵⁾。

国際政治の舞台にさらけ出され幕府は難関突破を試みる。興味深いのは19世紀中葉以降に欧米諸列強の進出を受けた時、アジアにおいてもインド、中国、朝鮮では対応できず植民地化の道を辿るのに、日本はインパクトに即応して、工業化に成功してアジア最初の近代国家となる点である。江戸時代、一方では「鎖国」と云われる制限貿易体制をひきながら、他方では諸外国の動き、特にアジアの植民地化の危機を熟知しており、それなりの対応ができた点である⁽⁴⁶⁾。

1858年の、徳川時代封建体制の危機的状況にあっても、この日本的特徴ともいえる「日々刷新」、「進化・進展」(evolutional development)の対応を見せる⁽⁴⁷⁾。

大変な政治経済状況の中から、時代に対応できる指導者が現れる。安政5条約の全部に署名したのは岩瀬肥後守の岩瀬忠震（1816-1861年）である⁽⁴⁸⁾。

彼は「幕末の三傑」と讃えられ、明治に入ってから島崎藤村、福地源一郎や川崎三郎も岩瀬の外交手腕を絶賛した。事実、オリファントの記述にも好意的に書かれる。しかし決して名家の出身ではなかった。学才を発揮し儀典官学頭に抜擢され、昌平学校教授となり、さらに徳川の危機的状況の中で政府海防掛となり、さらに外国奉行に抜擢された。この任命は8月16日（安政5年7月8日）で徳川政府が日蘭条約を結ぶ2日前、日英条約の4日前であった。つまり一方では將軍の家定の逝去から起こる諸問題と、他方では強引に署名に持ち込まれたアメリカとの条約後、いかに諸外国に対応するかを考え岩瀬を含む5人の外国奉行を任命した⁽⁴⁷⁾。

岩瀬は保守的な徳川中枢と連携する一方、日露条約の前に、開明派の福井藩士の橋本左内にハリス会談の模様を書き送った。岩瀬は外国交渉に力を発揮したが、当時の保守的な政治状況に囲まれる。老中の堀田正睦が岩瀬を連れて京都を訪問して上奏を願い出たが、孝明天皇の命を受けずに協定調印した点を非難され拒絶される。

また1858年5月に老中の井伊直弼が大老に就任すると、さらに保守的な政治状況となった。もし英仏連合艦隊が中国で起こした襲撃が我が国に向けられた場合に「アメリカが日本を守る」との条件が御所側に期待があったが、承諾を待たずに協定署名した責任を追及された。そのため日仏条約の時には作事奉行に降格された。所謂「安政大獄」の2か月前であった。さらに翌年には作事奉行も罷免され、手当取り上げで向島の自宅での蟄居命令を受け、失意にうちに1861年8月16日【陰暦7月11日】、44歳で逝去した⁽⁴⁸⁾。

対中国で苦闘するエルギン伯爵にとって、条約批准を待つ僅かな2週間の余暇を利用して急遽に訪問した平和日本を見て、中国社会との著しい差を実感する。同じアジアの中で同じ封建時代の中であつたが、全く変わらない中国人世界と柔軟な対応をする日本社会との違いに驚き感動する。まさに岩瀬肥後守が幕末政治舞台へ鮮明な形で登場し、また直ぐに消えていくのも極めて日本的である。

7 エルギン伯爵の日本訪問と中国との比較論

最近の論議で、封建主義時代の優れた経済外組織は資本主義の発芽・成長に不可欠と認識される。資本や技術の受容能力のない、秩序や教育のない国では、いくら資本・技術投下しても無駄に終わることから、改めて19世紀の幕末明治日本の対応とその後の発展に関心を持つ海外学者も多い。

当時の欧米知識人に関心を集めたのが、ダーウィン (C. Darwin) の『進化論』の影響を受けたハーバート・スペンサー (Herbert Spencer) の『社会進化論』がある⁽⁴⁹⁾。

エルギン伯爵やオリファントがヨーロッパ諸国、中南米またインド・中国・日本を訪問した時も社会進化論から観ていた⁽⁵⁰⁾。

また彼らは急な訪問であつたが、日本を訪問した先人のウィリアム・アダムス (W. Adams)、ケンペル (E. Kaempfer)、またシーボルト (P.F.B. von Siebold) の著作から日本を研究していた。面白いのは、日本の徳川への献上品にエンペラー号 (Emperor、のち日本名は播電丸) とな

る蒸気船を選んだ。その背景にインド・中国の為政者なら金銀・高級織物を喜ぶだろうが、日本人は「好奇心」が強いと聞いての選択だった。またアメリカのハリスが蒸気機関車を贈呈したのも共通する。それらはいずれも近代世界を創造したスコットランド人の発明品だった⁽⁶¹⁾。

結びとして、オリファントの記録ではあるが、書記として第8代エルギン伯爵の言葉を忠実に残したものと扱い、彼等の親た中国と日本の社会・政治・文化・国民性の比較を試みたい。

先ず彼らが船上から見た日本の平和でのどかな美しい風景である。英国を出発し熱帯アジアから中国を見て日本へ到着すると、先ず風景や木々の緑の中に緯度的にも近い故郷の英国・スコットランドでみた景色と極めて似た気分になったことが分かる。長崎入港や江戸湾航行の記述に、それが明察される⁽⁶²⁾。

次に見てきた中国人と今、眼前で出会う日本人との相違である。顔つきについては当時の欧米人はアイヌが日本人の原種で中国・韓国から侵入してきた近代移入民と区別してみているのが分かる。南方系の民族と似ながら独自の文化を持ち、さらに日本語の耳への響きが「きわめて不思議」であった⁽⁶³⁾。

日本の社会組織構成についても、武力行使をして清國を攻めたのは上海等で交渉役に出た役人が尊大で交渉もちがあかず武力で威嚇し臨んだのに対し、日本では長崎で小役人と交渉すると直ぐに地方行政長官から返事が届く「効率」に驚嘆する。江戸幕府の侍人事も観察しヨーロッパの封建組織よりも競争性が強いと評価する⁽⁶⁴⁾。

日本社会を見て、江戸を訪問しロンドン、パリ、ニューヨークを凌ぐ人口を持つ都市行政組織を形成し、都市生活に必要な警察・防災・相互扶助・金融制度までを作り上げ、さらに飛脚や貨馬制度の普及により一國全体にネットワーク化を形成しているのは大きな驚きだった。

また日本人の好奇心に支えられた智的欲求に関心を向ける。オランダ関係者から聞き、また稚拙ながら独自の西欧型帆船を建造する技術力、さらに潜在的な新技術習得の受容可能性とそれを実現する教育水準の高さに注目する⁽⁶⁵⁾。

さらに日本人の木造家屋や生活様式の独自性、風呂好きの生活や畳上での生活から、きわめて清潔な人種と感動する。女性の地位が他のアジア諸国に比して、高く教養深い点に注目する。また子供もよく訓育されており、振る舞いにも西欧人にも及ばない品格があるとする。独自の文化として、彼らが注目するのが漆器である。中国を代表するのが陶磁器にあり、日本では漆器にあるとして詳しく観察する。さらに紙の質と加工技術に驚嘆する。同時に日本の絹・綿製品がむしろ中国よりも優れ、すぐにもロンドンやパリで販売できると記述する⁽⁶⁶⁾。

彼らの関心は日本人の盆栽や箱庭の趣味、また家の間を仕切る垣根、日本人の着物文化や食生活に目を向ける。特に將軍からのもらった和菓子の味について、パリ、ニューヨークの菓子店にも負けない美味と評価している。さらに日本人文化では、寺院とお茶屋が「人々の心のオアシス」と観るのも興味深い。さらに寺院での読経や庶民の冠婚葬祭の様式にも目を向ける⁽⁶⁷⁾。

また中国人が金銀をはじめ豪華・華麗な美需品嗜好であったのに対して、日本人の上流階級は極めて質素儉約な生活にあり、著しく人間的教養と高度の精神性をもつ点に注目する。例えば協

定開印に訪問した太田備後守屋敷の印象を書いている。この点ではアジアの多くの国では、政治・社会的階級の格差が著しく生活様式にも大差があったのに対し、日本では、その懸隔は少なく、封建時代固有の階級を存続させながらも、対流現象による上昇や下降がダイナミックに存在するのではないかと観た点である。これは日本社会固有の「効率」(efficiency)と結びついていた⁶⁸⁾。

8 結び エルギン伯爵来日の意義

エルギン伯爵とオリファントが1858年に見た日本社会は、まさに江戸幕府の最後の時代であったが、世界から孤立しながらも日本固有の「日進月歩」のダイナミズムを存続させていた。その日本の持つ将来性に、彼らは著しい関心を示した。その後の日本の歴史は、19世紀末には日清戦争で中国を破り、20世紀初頭には日露戦争でロシアを破り「東洋のイギリス」(Britain of the East)と呼ばれるアジアの強国になる。

この歴史プロセスは、まさに社会進化論の好例として西欧世界の注目を集める。その日本社会の変質・成長の端緒が1858年のエルギン伯爵の訪問と日英通商条約締結にあった。

日本とのつながりは確かに英国よりもアメリカが早かったが、アメリカから日本へきた人々自体もアメリカ生まれよりもイギリス(大半がスコットランド)からの移民がアメリカ経由で到来した人が多かった。たとえばアメリカのペリー提督や明治初めに日本にアメリカからきたヘボン牧師も英国スコットランド起源の人々であった⁶⁹⁾。

さらにアメリカは1864-66年南北戦争が起り、国内問題で深刻な時期に遭遇し、再び海外アジアに来るには少しの時間を要した。

一方、イギリス資本主義はセポイの乱を平定しインド帝国を作り上げると、まずインド帝国の首都をカルカッタに据えて中国・アジアにむけての本格的な進出を試みる。しかも本国からの資金を使わずインドから中国へアヘンを輸出し、中国の物産をインド経由で本国に運ぶという「三角貿易」を完成させた。その推進役はJ&M, P&O等のスコットランド系商社・貿易商人であった⁷⁰⁾。

中国の次に狙うのは極東の小島の日本であった。イギリス起点の産業革命期の成果と云える陸の蒸気鉄道、海上の蒸気船と空の電信ネットワークが完成するのは、ちょうど地球の裏の日本であった。そして多くのスコットランド人商人、教師、技師、宣教師が、そのネットワークを介して日本へ到来する。また、そのあと、日本人が世界に出ていく時にも、彼らスコットランド人のネットワークが支援してくれることになる⁷¹⁾。

そのネットワークの拠点に日本に置く契機となったのが第8代エルギン伯爵たちであった。わずか2、3週間の滞在であったが、彼らの心に刻まれたインパクトは想像できないほど大きかったと云えよう。

中国の治安はおさまらず、エルギン伯爵は1860年に再度中国へ出張し、北京の「夏宮殿」を破壊する事件を起し、中国の歴史に汚点を残す。随行したH.B. ロッホが「エルギン伯爵の1860年の

第2回遣中使符録』を残した⁽⁸²⁾。

エルギン伯爵は1861年4月帰英したが、インド総督のカニングの後継者として選ばれ、翌年の1月には命を受けてカルカッタへ出立した。1863年11月に、その地で客死するが特にインドの鉄道ネットワークの形成に貢献した。興味深いのは彼が1859-60年に英国郵便局長官、1859-1862年グラスゴウ大学名誉学長になっていたことである。未開分野だが、その後の日本の郵便・大学制度に無関係とさえない関係があったと推測される⁽⁸³⁾。

オリファントの帰国後の活動は、もっと興味深い。刃傷事件に遭遇しながらも「日本と日本人」を愛し、各地で講演を行い、特にアバディーンで開催された英国科学促進会議で「日本の地理」を講演した記録がある。1865-1867年にはスターリング選出の国会議員となった。明治維新の知らせを聞いて、匿名で英国の新聞・雑誌に「若きサムライの国」の紹介をした。例えばエディンバラの『ブラックウッド・マガジン』に「日本での革命ロマンス」を投稿し掲載された⁽⁸⁴⁾。

エルギン伯爵やオリファントにより新しく外交関係が開かれた極東の島国・日本へ、スコットランド商人・技師・教師・宣教師たちが関心を深める。特に、この時代ではスコットランド東海岸アバディーン、ダンディ、セント・アンドリュース、ファイフ出身者が多くアジア・日本へ到来したのもうなずける。さらに1860年代以降には、スコットランドの本格的な産業革命、鉄道・機械・造船業の成果をうけて、エディンバラ、スコットランド出身者が流れの中心を占めるに至る⁽⁸⁵⁾。

【注】

- (1) エルギン伯爵は清国への派遣にあたり、外相クラレンドンからアロー号事件処理後に日本訪問の指示を受けていた。石井 幸『日本開国史』（吉川弘文館 1981年）372頁。
- (2) 英国での指導教授 S.G. チェックランド教授の遺稿が『エルギン一族研究』（*The Elgins, 1766-1917, A tale of aristocrats, proconsuls and their wives*, Aberdeen University Press, 1988）がある。
- (3) A. Bruce, *The Bruce—Robert King of Scots, A Personal View*, Masonic Publishing Co, 2006 がある。畠田理忠他訳『スコットランド史、その意義と可能性』（R. Mitchison 著 未来社 1998年）70頁。
- (4) 森 龍『スコットランド王国秘話』（大修館書店 1988年）297-300頁。
- (5) F. Maclean, *A Concise History of Scotland*, Thames & Hudson, 1970. pp.18-40, 42 & 43.
- (6) C.W. Thomas, *Scotland's Work and Worth*, Vol. 1, Oliphant, Anderson & Ferrier, 1909, pp.64-83.
- (7) J.G. Bourinot, *Lord Elgin*, Dodo Press, 1903, p.4.
- (8) J. Buchan, *Capital of The Mind*, John Murray, 2003, pp.159-140.
- (9) S.G. Checkland, *op. cit.*, pp.58-62. なをヘンリー・ダングスは18世紀後半のスコットランドの指導者であり、イングランド体制に順応しながらスコットランド人の英国政治体制への拡張を行い、特に自らも関与した東インド会社に有能なスコットランド人を送りこみ大英帝国の重層的人事（イングランド人の官僚には本国と、スコットランド人副官に現地との対応）を作った人でもある。拙著『近代スコットランド社会経済史研究』（同文館 昭和60年）67-69頁。
- (10) エルギン伯爵が多額の出費をして集めたギリシア神像や壁画であったが、大英博物館からの支払いは出資3万5千ポンドの半額に過ぎなかった。この借財の支払いが第8代エルギンの外交官出張につながるのである。
- (11) J.G. Bourinot, *Lord Elgin, Complete & Unabridged*, Tutis, rep in 2008, p.4.
- (12) 英国を代表する詩人バイロンが詩を公表しエルギン伯爵の行為を弾劾した。G.G. Byron, Lord, Childe Harold's Pilgrimage, *Cantos*, 1 and 12, 1812 *The Curse of Minerva*, 1812: B. Kay, *The Scottish World*, A

Journey into the Scottish Diaspora, Mainstream Publishing, 2006, p.273.

- 03 S.G. Checkland, *The Gladstones*, 1971.
- 04 当時の中国と英国の貿易関係については、岡本隆司『近代中国と海関』（名古屋大学出版会 1999年）に詳しい。
- 05 拙著『近代スコットランド鉄道・海運業史—大英帝国の機械の都グラスゴウ』（御茶ノ水書房 1999年）12-15頁。
- 06 拙著『国際日本を拓いた人々—日本とスコットランドの絆』（同文館 昭和59年）3-6頁。
- 07 J.G. Bourinot, *op cit* (*Lord Elgin*), p.5.
- 08 S.G. Checkland, *op cit* (*Elgins*), p.72.
- 09 ジャマイカ近隣は伝統的にスコットランド人移民が多く、特に17世紀末の西インド会社と呼ばれたグリエン会社は成功しなかったが関係性を維持し、グラスゴウ発明・製作の製糖機械が輸出され成功していた。また日本では薩摩藩が琉球での砂糖生産のために購入した最初の西欧機械もグラスゴウ製の砂糖機械であった。当時の状況は上原兼善『領国と藩貿易—薩摩藩の琉球密貿易』（八重岳書房 昭和56年）287-190頁。
- 10 スコットランド人とカナダの結びつきは極めて強い。ガルブレイス教授の『スコッチ気質』（G.K. Galbreith 著 *The Scotch Nature* 土屋 哲訳 河出書房新社 1972年）がある。
- 11 J. Calder, *Scots in Canada* Luath Press Ltd. 2003 に詳しい。
当時のカナダ商業については、豊原次郎『カナダ商業史研究序説』（千倉書房 昭和56年）がある。
- 12 S.G. Checkland (*op cit*), pp.130-134.
- 13 G. Donaldson, *The Scots Overseas*, Robert Hale, 1966. pp.92-93.
- 14 H.L. Cowan, *British Emigration to British North America, The First Hundred Years*, 1967. p.96 Toronto University Press.
- 15 D. McCalla, *The Upper Canadian Trade, 1834-1872, A Study of Buchanans Business*, Toront, 1979. p.62.
- 16 拙著『スコットランド・ルネッサンスと大英帝国の繁栄』（藤原書店 2003年）255-157頁。
- 17 G.B. Endacott, *A History of Hong Kong*, Oxford University Press, 1958. p.91.
- 18 アヘン貿易でもスコットランド商人が積極的に関与した。P. Napier, *Barbarian Eye, Lord Napier in China, 1834, The prelude to Hong Kong*, Brasseys, 1995, pp.55, 56, 63-66, 89-101.
- 19 R. Hyam, *Britain's Imperial Century, 1815-1914, A Study of Empire and Expansion*, Cambridge University, 2002. pp.9, 126, 142-154. セボイの反乱については、東田雅博『大英帝国のアジア・イメージ』（ミネルヴァ書房 1996年）54-87頁に詳しい。山本 進『清代の市場構造と経済政策』（名古屋大学出版会 2002年）111-112頁、黒田明伸『中華帝国の構造と世界経済』（名古屋大学出版会 1994年）12-17頁。
- 20 当時の中国と英国の関係については、西條美紀訳『香港』（J. モリス著 講談社 1995年）36-83頁。
- 21 Lord Elgin, in *Encyclopedia Britannica*, 9th ed., Vol. 8. p.132.
- 22 T. Waldron ed., *Letters and Journals of James, Eighth earl of Elgin*, Bibliobazaar, 1872, rep in 2008. p. 51.
- 23 原文は *Edinburgh Blackwood Magazine* に連載された論文（A Cruise in Japanese Waters, 1859）をまとめて出版された。島田ゆり子訳『日本への航海』（S. オズボーン著 雄松堂 2002年）がある。
- 24 オリファントの生涯については M.O.W. Oliphant, *Memoir of the Life of Laurence Oliphant and of Alice of his wife*, W. Blackwood & Sons がある。オリファントの記述した岡田章雄訳『エルギン卿遣日使節録』（雄松堂 1978年）がある。
- 25 第8代エルギン伯爵と日本については、山田 勝『イギリス紳士の暮末』（日本放送協会 2004年）27, 55-60頁、2度目の中国訪問は、H. Loch, *Personal narrative Of Occurrences During Lord Elgin's Second Embassy To China in 1860, 1900* rep in USA がある。
- 26 鶴飼政志『幕末維新期の外交と貿易』（校倉書房 2002年）31-40頁、またアジア史から把握した左久 梓訳『西洋の支配とアジア, 1498-1945』（K.M. パニッカール著、藤原書店 2001年）、162-224頁、世界史的に把握した川勝平太編著『アジア太平洋経済圏史 1500-2000年』（藤原書店 2003年）がある。
- 27 武野梨子『藩貿易史の研究』（ミネルヴァ書房 昭和54年）2-4頁。

- 98 日米関係史から、細谷千博『日米関係通史』（東京大学出版会 1995年）、協定調印の影響については、大山祥『日条約下における開市開港の研究』（鳳書房、昭和42年）16頁。また西川正臣『幕末明治の国際市場と日本、生糸貿易と横浜』（1997年）20-32頁。
- 99 宮永 孝『日本と英吉利日英交流の400年』（山川出版社 2000年）173-182頁、犬塚孝明『密航留学生たちの明治維新 井上馨と幕末藩士』（日本放送協会 2001年）45-76頁。
- 100 池田 諭『吉田松陰』（大和書房 1993年）130-140頁、海原 徹『松下村塾の人びと、近世私塾の人間形成』（ミネルヴァ書房 1993年）72-74頁。
- 101 小川亜弥子『幕末期長州藩洋学史の研究』（思文閣出版 1998年）145頁。
- 102 石井寛治・関口尚志編『世界市場と幕末開港』（東大出版会 1982年）95-100頁。
- 103 石井寛治『近代日本とイギリス資本、ジャーディン・マセソン商会を中心に』（東京大学出版会 1984年）15-19, 99-104頁。
- 104 権村又次・山本有造『開港と維新』（岩波書店 1989年）11-14頁。
- 105 山下重一『スペンサーと日本近代』（御茶の水書房 1983年）37-54頁。
- 106 川崎紫山『幕末三俊』（春陽堂 明治30年）25-54頁。
- 107 山本盛敬『小説横浜開港物語 佐久間象山と岩瀬忠震と中居屋重兵衛』（フィーツソリューション 2009年）4-14頁。
- 108 岩瀬は幕末の変革期に、安政の神奈川5条約の調印の役を果たし、その直後に歴史から消える。大久保利謙『幕末維新の洋学』（吉川弘文館 昭和61年）41-43, 73, 75, 84頁。
- 109 山下重一『スペンサーと日本近代』（御茶の水書房 1983年）6-9頁。
- 110 拙著『御雇い外国人ヘンリー・ゲイアー、近代技術教育の父、初代東大都検(教頭)の生涯一』（文生書院 2007年）65-66頁。
- 111 近代世界におけるスコットランド人の発見・発明については A. Herman, *How the Scots Invented the Modern World, The True Story of How Western Europe's Poorest Nation Created Our World & Engineering in it*, Crown Publishers, 2001) に詳しい。
- 112 この時代の日本と中国の比較は、吉田光邦『日本と中国—技術と近代化—』（三省堂選書 1898年）がある。
- 113 欧米から見たアジア・東洋理解にも役立つ視点あろう。日本社会が階級格差が少なく、特に一方では武士階級の為政者層が「精神文化」を尊び、士農工商の商階級が富裕な「町方文化」を作った。また農民たちも自らの「祭文化」を作り、他国の封建時代に見られない社会を形成した。当時の多くの欧米訪日者記録に、その驚嘆が書かれる。
- 114 前掲書（『日本への航海』）58頁、前掲書（『エルギン遣日使録』）33頁。
- 115 拙稿「序にかえて」（平野勇夫訳『大日本』*The Britain of the East*（Henry Dyer 著 実業之日本社 1999年）1-13頁。本来の副題は A Study in National Evolution とあり、ゲイアーがスペンサー視点から幕末・明治日本を覗いていたことが分かる。
- 116 前掲書（『航海』）57, 69, 176頁、前掲書（『使録』）119, 122頁。
- 117 前掲書（『使録』）、54, 80, 169-170頁。
- 118 前掲書（『使録』）、136, 202頁。
- 119 ベリー提督の兄オリバーは1812年エリー湖上での対オランダ戦争に勝利し著名なスコットランド系アメリカ人と記録される。N.W. Henderson, *The Scots, Helped America*, Julian Messner, NY, 1969. p.73.
- 120 スコットランド人のアジア・日本進出は、拙著『近代スコットランド移民史』（前掲）229-250頁、拙稿「スコットランド人の近代アジア交易活動—近代ディアスポラの視点から—」（『歴史評論』644号校倉書房 2003年12月）33-47頁。
- 121 拙著『国際日本を拓いた人々 日本とスコットランドの絆』（前掲）。
- 122 E. Loch, *Personal Narrative of Occurrences During Lord Elgin's Second Embassy to China in 1860*, July 1900がある。
- 123 V. Gibbs & H.A. Doubleday, *The Complete Peerage of England, Scotland and Ireland, Great Britain and the United Kingdom*, Vol. V. Catherine Press 1926, pp.44-45.

64 オリファントの報告, *Report of the 29th meeting of the British Association for the Advancement of Science*, Aberdeen, September in 1859, London, 1860. 194-195. 匿名の論文が *Blackwood's Magazine*, Vol. 115, January-June, 1874. pp.696-712. に掲載.

65 合併後, スコットランド亜麻工業がアバディーン, ダンディ地域の東海岸から大陸間で原料輸入から興隆した。造船業もアバディーンから発達した。次第に南下しエディンバラ, さらにグラスゴウに産業の中心が移り, そこで産業革命が開花した。拙著『近代スコットランド社会経済史研究』(同文館 昭和60年) 64-67頁。